



決算(2)

使い方

- 画面をクリックするとプログラムが進んでいきます。
-  をクリックすると次のページに進みます。
-  をクリックすると前のページに戻ります。
- ページ数は右下に表示されています。

決算(2)

1. 決算(1)の復習
2. 決算整理仕訳
3. 現金過不足(既習)
4. 貸倒引当金(既習)
5. 減価償却(既習)
6. 引出金(既習)
7. 売上原価(既習)
8. 繰延・見越
9. 消耗品
10. 訂正仕訳
11. 貸借対照表・損益計算書の作成



今回は私が案内するよ！
今回は決算について説明する。

1. 決算(1)の復習

さて、今回は決算(2)ということで、前回の内容を具体的に見ていくんだけど、前回も出した図で決算を概観してみよう！

損益計算書
として報告

費用	収益
資産	負債
	資本

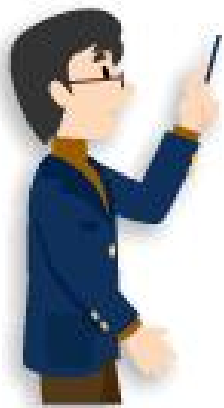
費用	収益
儲け分	

分解

貸借対照表
として報告

資産	儲け分(資本)
	負債
	資本

ということなんだ！



1. 決算(1)の復習

その途中で

- ①残高試算表の作成
- ②決算整理仕訳
- ③貸借対照表・損益計算書の作成

という説明をした。

①は単純に言うと期間の仕訳を集めたモノなので、そこまで説明はいらないだろう。
ぜひテキストで確認して欲しい。

ここで説明するのは

- ②決算整理仕訳
 - ③貸借対照表・損益計算書の作成
- だ。



2. 決算整理仕訳

簿記3級の決算整理仕訳でやらなければならないことを挙げると

1. 現金過不足の処理
2. 貸倒引当金の設定
3. 有価証券の評価替え
4. 減価償却の処理
5. 引出金の処理
6. 売上原価の計算
7. 費用・収益の繰延と見越
8. 消耗品の処理

と言ったところだ。

このように一欄にするまだまだ学習することがたくさんあるような気がするけど、実は1～6はもう説明してしまったことだ。

新たに学ぶのは7と8だけだ！

では、まず1～6を復習していこう！



3. 現金過不足(既習)

まずは、「現金過不足」について説明するよ。
これは「現金」のフラッシュで扱った内容だ。

ちょっと想像してもらえばわかるんだけど、現金に関する取引は
とても多いんだ。
商品を仕入れたり、売ったり、お金を貸したり、借ったり...

そんなわけで、
実際に金庫に入っている額と帳簿に記入されている額
が一致しないことがあるんだ。

これを「現金過不足」といい、「現金過不足」勘定で仕訳するんだ。

この「現金過不足」について、もうちょっと具体的にみていこう！



3. 現金過不足(既習)

① 現金の実際有高が帳簿残高より¥3,000多かった。

当然、**実際有高に帳簿を合わせる**ので、この場合は、「帳簿の現金勘定は増やしとかないと！」と考えるんだ！

そこで

(借方) **現金 3,000** (貸方) **現金過不足 3,000**

と仕訳する。

ところで、**現金過不足勘定**は5つの要素のうち、どれだろうか？
資産？ 負債？ それとも...？



3. 現金過不足(既習)

実は...

「仕訳」のフラッシュで

「仕訳に出てくる勘定は資産・負債・資本・費用・収益に分けられる」といったんだけど、実はこの「現金過不足」はそのどれにも分けられない数少ない勘定の一つなんだ！

ちょっと考えてみて欲しい。

さっき

① 現金の実際有高が帳簿残高より¥3,000多かった。

としたんだけど、コレはどこかでミスがあったからこそその状況だ。

当然、担当者はどうしてこうなってしまったのか調べなくてはならない。

そこで、調べた結果、次のようなことがわかったとしよう。



3. 現金過不足(既習)

② 上記の現金過不足のうち、全額が売上の記帳洩れであることが判明した。

このときには、

(借方) **現金過不足 3,000** (貸方) **売上 3,000**

と仕訳する。

本来、売上の記帳洩れがなければ(=ミス無く仕訳されていれば)

(借方) **現金 3,000** (貸方) **売上 3,000**

となっていたはず。

① (借方) ~~現金過不足 3,000~~ (貸方) **売上 3,000**

② (借方) **現金 3,000** (貸方) ~~現金過不足 3,000~~

現金過不足が相殺されれば同じ仕訳になることを確認して欲しい!



3. 現金過不足(既習)

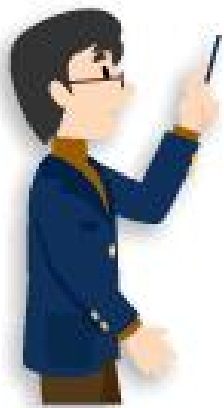
先ほどは、

- ② 上記の現金過不足のうち、全額が売上の記帳洩れであることが判明した。

としたけど、今度は

- ② 上記の現金過不足のうち、¥2,000が売上の記帳洩れであることが判明した。

として考えてみよう。



3. 現金過不足(既習)

そうすると

- ① (借方) **現金 3,000** (貸方) **現金過不足 3,000**
- ② (借方) **現金過不足 2,000** (貸方) **売上 2,000**

となるよね。

ここまま、1,000円分の現金過不足の原因が判明せず、このまま決算になってしまったとしよう。

現金過不足は、期末になっても原因がわからなければ、未解決のまま次の年に持ち越すのは適当でない(なぜなら、それを続けてしまうと、何十年も前のミスが反映され続けるかも知れないから)ため、**雑損**または**雑益**として処理するのだ！

つまり、1,000円分については、**「なんかよくわからんが、儲かってしまったお金」**として扱う。



3. 現金過不足(既習)

「でも『なんかよくわからんが、儲かってしまったお金』として扱っていいのか？」
っていう疑問があると思う。

でも、原因が結局わからないんだから、このように処理するのが最も合理的なんだ。

理由としては、

1. 時期以降まで(来年以降まで)持ち越すのは適当でない
2. ミスの範囲だから、普通は少額
などが考えられる。

納得して欲しい！



3. 現金過不足(既習)

いままでの処理の説明で気がついた人もいるかも知れないけれど、現金過不足は原因がわかれば消えて無くなるし、原因がわからない部分は雑益・雑損に換えられてしまうので、期末になるとかならず消えてしまう勘定なんだ。

そのような仮の勘定としておかれるのが「現金過不足」なので、資産・負債・資本・収益・費用のいずれにも属さないと言えるんだ。

わかってもらえたかな？

では、具体的に見ていこう！



3. 現金過不足(既習)

①10,000

②7,000

③3,000

①<現金過不足が生じたとき>

現金の実際有高が帳簿残高より¥10,000少なかった。

(借方) **現金過不足 10,000** (貸方) **現金 10,000**

②<不一致の原因が決算時までにわかったとき>

上記の現金過不足のうち、¥7,000は交通費の支払いが記載洩れてあることが判明した。

(借方) **交通費 7,000** (貸方) **現金過不足 7,000**

③<不一致の原因が決算時までにわからなかったとき>

上記の現金過不足のうち、原因が判明した分以外は原因不明につき雑損とすることにした。

(借方) **雑損 3,000** (貸方) **現金過不足 3,000**

理解できたかな？



4. 貸倒引当金(既習)

次の貸倒引当金は、必ずと言っていいほど出題されている範囲だ。
難しいことではないので、しっかり理解して欲しい。

貸倒とは、得意先(こっちが商品をうってお金をもらう相手)が倒産してしまったり、財政状態が悪くなったりして、売掛金や支払手形などの債権(=後でもらえるお金)が回収できなくなってしまうことのことだ。

得意先が倒産してしまったりすることは、アテにしていたお金が入ってこないということだから、これは結構困ってしまう。
そこで、このような貸倒に備えて、ある程度の金額を準備しておく。それを貸倒引当金という。
日商簿記3級では、差額補充法が出ることになっている。
貸倒引当金の設定は決算時に行われる。



4. 貸倒引当金(既習)

例1

当期末の受取手形残高は¥800,000、売掛金残高は¥1,000,000、貸倒引当金の設定率は2%であり、貸倒引当金の残高は¥20,000である。

$$(800,000 + 1,000,000) \times 2\% = 36,000$$

つまり、貸倒引当金は36,000円の状態です。次の1年に入っておきたいわけだ。

しかし、現実には貸倒引当金は20,000円分しかプールされていない。

そこで、差額の

$36,000 - 20,000 = 16,000$ 円を足して、36,000円プールされている状態にするんだ。

(借方) **貸倒引当金繰入 16,000** (貸方) **貸倒引当金 16,000**

これで負債の貸倒引当金は36,000円分になった。



4. 貸倒引当金(既習)

例2

当期末の受取手形残高は¥800,000、売掛金残高は¥1,000,000、貸倒引当金の設定率は2%であり、貸倒引当金の残高は¥40,000である。

$(800,000 + 1,000,000) \times 2\% = 36,000$

貸倒引当金は36,000円の状態で次の1年に入っておきたい。
ここまでは例1と全く一緒だ。

しかし、現実には貸倒引当金は40,000円分も残っているわけだ。

そこで、差額の

$40,000 - 36,000 = 4,000$ 円は必要以上にプールされているので、その分は戻すんだ。

(借方) **貸倒引当金 4,000** (貸方) **貸倒引当金戻入 4,000**

これで負債の貸倒引当金は36,000円分になる。



4. 貸倒引当金(既習)

さて、今まで説明してきたのは、
つぶれるかも知れないから、こちらで非常用のお金を用意しておこう
というものだった。

次に、実際につぶれてしまったときの処理を考えてみる。

例3

前期に計上した売掛金 ¥20,000 が貸倒れた。
貸倒引当金の残高は ¥36,000 である。

(借方) **貸倒引当金 20,000** (貸方) **売掛金 20,000**

これで、貸倒引当金の残高は16,000円ということになる。



4. 貸倒引当金(既習)

例4

前期に計上した売掛金 ¥45,000 が貸倒れた。
貸倒引当金の残高は ¥36,000 である。

(借方) **貸倒引当金 36,000** (貸方) **売掛金 45,000**
貸倒損失 9,000

これは見積もっていた36,000円を超えて貸倒れてしまった
場合の仕訳だ。

超えてしまった分は貸倒損失(貸倒償却)という費用勘定を使う。



4. 貸倒引当金(既習)

債権を回収できなかったとしても、全額回収できないとしても、一部は回収できることがある。
最後にこの処理を見ていこう！

例5

前期に貸倒れた¥5,000を現金で回収した。

(借方) **現金 5,000** (貸方) **償却債権取立益 5,000**

ちょっと長い名前なんだけど、「貸倒れたとして償却処理した債権の一部を取り立てた収益」という、意味をそのまま勘定にした名前だ。

よく理解してほしい！



5. 減価償却(既習)

次に、固定資産のフラッシュで出てきた**減価償却**について説明する。

今見たように、固定資産は帳簿に取得金額で記されているから
例えば10万円で買ったパソコンは10万円と記されている(当たり前)。
つまり、10万円分の価値だと記されているわけだ。

でも、皆さんが今使っているパソコンを売るとして、買ったときと
同じ価値だと言えるだろうか？

売るとしたら、買ったときよりもずっと少ない値段でしか
売れないよね？

このことからわかるように、時間が経つにつれて、パソコンの
価値を徐々に小さくする処理をすることが正しい処理といえるわけだ。
何年も前に10万だったパソコンが今でも10万と表示されているのは
おかしいということだ。

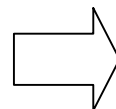
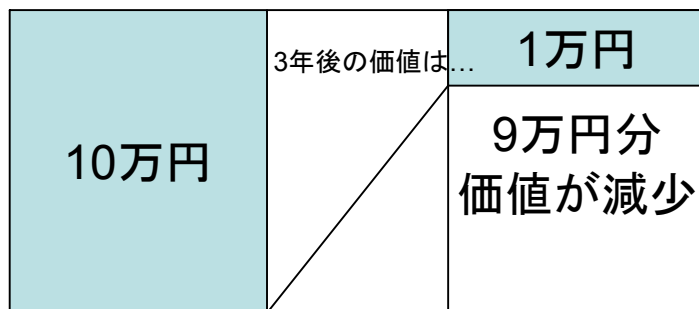


5. 減価償却(既習)

今までのことを整理するよ。

固定資産は使っていくうちに古くなり、価値が減っていく。
この固定資産の価値の減少を、使用される期間にわたって費用として計上していくことを減価償却という。

先ほどの10万円のパソコンの例で言うと、3年使った後に価値が1万円になっているとする(これは普通問題中に示される)と、残存価格が1万円、毎年の減価償却費(費用)は3万円と考えられる。



毎年3万円ずつ
価値が減っていると
考える

5. 減価償却(既習)

次に、用語を確認しながら、減価償却費の出し方について見ていく。
固定資産の価値が年々減少していく時に使う勘定が減価償却費。
また、使用し続ける期間が耐用年数。
そして、3級では今見たような方法の定額法を使う。

今の例で言うと、9万円分を3年で割って、毎年3万円ずつ
減価償却費がかかるとして扱うんだ。
毎年同じ額が費用として扱われるので定額法と呼ばれる。

さらに、減価償却費の記帳の方法は直接法と間接法がある。
これを今から具体的に見ていくよ。



5. 減価償却(既習)

まずは直接法だ。

この方法は、名前の通り、固定資産の価値を直接減少させる方法だ。

パソコンの例だと、毎年3万円ずつ価値を下げることは説明してきた。
期首に残存価格10,000、耐用年数3年の備品100,000を
購入したとしよう。

(借方) **備品 100,000** (貸方) **現金など 100,000**

とするのは、もういいね。

そして1年経った期末には、

$(100,000 - 10,000) \div 3 = 30,000$ 円分、

備品の価値を下げるのが正しい処理であることも説明してきた。



5. 減価償却(既習)

直接法はここで

費用の発生

(借方) **減価償却費 30,000** (貸方) **備品 30,000**

資産の減少

という処理をする。

先ほど

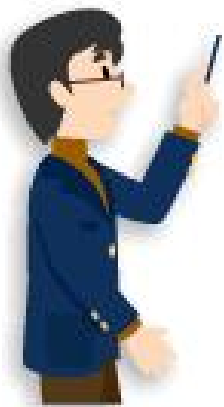
(借方) **備品 100,000** (貸方) **現金など 100,000**

という処理をしたので、今の2つの仕訳を合わせると

(借方) **備品 70,000** (貸方) **現金など 100,000**

(借方) **減価償却費 30,000**

となり、しっかりと30,000分減らされた実態が現れているわけだ！



5. 減価償却(既習)

費用の発生

さらに、次期末にも
減価償却費 30,000 (貸方) 備品 30,000

資産の減少

と処理し、その年の貸借対照表には
昨年の備品70,000円と相殺されて、備品は40,000円残っている。

ここまでを整理すると
1年目末:70,000円
2年目末:40,000円
が備品の価値とすることになるんだ。

ただ、直接法には都合の悪い点がある。
それは、直接価値を減らしてしまうと、取得金額がわかりにくくなって
しまうということだ。

そこで、普通は間接法が使われる。



5. 減価償却(既習)

間接法の場合、期末ごとに

費用の発生

(借方) **減価償却費 30,000** (貸方) **減価償却累計額 30,000**

負債の増加
と考える

という処理をする。

減価償却累計額とは、その名の通り減価償却分を溜めておいて、必要な時だけ差し引いて使うものだ。

備品取得時に

(借方) **備品 100,000** (貸方) **現金など 100,000**

という処理をしたので、取得時と1年目末の仕訳を合わせると

(借方) **備品 100,000** (貸方) **現金など 100,000**

(借方) **減価償却費 30,000** (貸方) **減価償却累計額 30,000**

となる。



5. 減価償却(既習)

さらに、次期末にも

(借方) **減価償却費 30,000** (貸方) **減価償却累計額 30,000**

と処理する。

今までの仕訳を合わせると、2回分の減価償却費が引かれて

(借方) **備品 100,000** (貸方)

(借方) (貸方) **減価償却累計額 60,000**

となっている。

ここでは、

購入金額: 100,000円

現在の価値: $100,000 - 60,000 = 40,000$ 円

との両方がわかりやすくなっている。

一般的に間接法が使われ、試験でもこっちの方法が出る。



5. 減価償却(既習)

それでは、具体的に見ていこう！

下記の資料にもとづいて、間接法の減価償却の処理をなさい。

備品: ¥500,000

耐用年数5年 残存価格は取得金額の10% 定額法

建物: ¥2,000,000

耐用年数15年 残存価格は取得金額の10% 定額法

(借方) 備品減価償却費 90,000 (貸方) 備品原価償却累計額 90,000
(借方) 建物減価償却費 120,000 (貸方) 建物原価償却累計額 120,000

$$500,000 \times 0.9 \div 5 = 90,000$$

$$2,000,000 \times 0.9 \div 15 = 120,000$$

となるのは理解できているかな？



6. 引出金(既習)

次に、引出金について説明するよ。

引出金とは、店主が店の現金や商品を私的に使った場合に一時的に記録しておくための資本勘定だ。

一時的というのは、期末に資本金と相殺されるからだ。

どういうことか具体的に考えてみる。

例えば、八百屋さんをやっているおじさんがいるとする。

そのおじさんは、自分が食べる野菜をわざわざ他の店から買うだろうか？

たぶん、自分の店で扱っている野菜を食べるよね？

また、個人で出資した店だから、ちょっと飲み物を自動販売機で買おうとしたとき、店のレジから小銭を持っていくことも問題ない。

そのようなときに引出金勘定を使う。



6. 引出金(既習)

では、具体的に見てみよう！

B商店の店主が現金 ¥ 50,000 を家計費として引き出した。

(借方) **引出金 50,000** (貸方) **現金 50,000**

資本の減少
引出金は
常に借方で
溜められる

資産の減少

決算に際して、引出金 ¥ 50,000 が記載されていたので、
必要な仕訳をした。

(借方) **資本金 50,000** (貸方) **引出金 50,000**

資本の減少

資本の増加、
というよりも
引出金を
相殺している

わかったかな？



7. 売上原価（既習）

次は売上原価について説明する。
商品売買は、「仕入」「売上」「繰越商品」の3つの勘定で仕訳する。
ここではこのように処理する仕組みを説明しよう。

前からことある度に言っていることなんだけど、簿記の目的は

1. 企業の経営成績を明らかにすること

<1年間で、どれくらい儲かったか(または損したか)>

2. 企業の財政状態を明らかにすること

<その会社は何を、どれくらい持っているのか>

なんだ。



7. 売上原価(既習)

1. 企業の経営成績を明らかにすること
<1年間で、どれくらい儲かった(または損したか)>
2. 企業の財政状態を明らかにすること
<その会社は何を、どれくらい持っているのか>

この視点から考えると、商品売買は

- ・商品を買ったというのは、1. に関わる
- ・在庫がどれだけあるかは、2. に関わる

ここまではいいね？



7. 売上原価（既習）

簿記の世界では、商品についての儲けの額の計算は、アバウトに言うと

「売り上げた額」－「その原価」＝「儲け」

と計算する。

例えば、70円で仕入れたネジを100円で売ったら30円の儲け

$100 - 70 = 30$

となるんだ。

当たり前の話だよね。

注目して欲しいのは「**その**原価」というところ。



7. 売上原価(既習)

注目して欲しいのは「**その**原価」というところ。

さっきの例で言うと、現金でネジ1個70円で10個仕入れて、100円で6個売れたとすると、

売った6個については

$$\underline{(100 \times 6)} - \underline{(70 \times 6)} = 180 \text{円の儲け}$$

売上

売上原価という

残りの4個については

$$70 \times 4 = 280 \text{円の在庫}$$

繰越商品という

となる。

10個のうち...

6個

売上原価

4個

在庫
= 繰越商品

「儲け」の
計算
に必要

「持ち物」の
計算に
必要

在庫のネジは次の年に売ることができるので、売上の原価にならずに、資産として考えられるんだ。



7. 売上原価(既習)

これを『図』で見ると、

仕入 700	売上原価 420
	繰越商品 280

① @70円 × 10個 (仕入)

② @70円 × 6個 (売上原価)

③ @70円 × 4個 (繰越商品)

図の左側が仕入の10個、右側が売り上げた分の6個と残りの4個だ。

ここまではいいね？

では次の年について考えてみるよ。



7. 売上原価(既習)

次の年、現金で1個70円で5個仕入れ、100円で7個売った。

前の年と合わせて9個あるから、7個売することは可能だよね？
これをもう一度『図』で見ると次のようになる。

前年の残り
@70×4個

前年の繰越商品

280

売上原価

490

今年売った分の原価
@70×7個

今年の仕入
@70×5個

仕入
350

この年の繰越商品
140

今年売れずに次年度へ
@70×2個

これもいいかな？

ところで、次の図を見て欲しい。



7. 売上原価(既習)

前年の繰越商品 280	売上原価 ?
仕入 350	この年の繰越商品 140

さっきの図で、1箇所だけ数字を隠してみたんだけど、この「？」には、いくつが入るかわかるかな？

...

...

簡単だよな？

$(280 + 350) - 140 = 490$ だ。

ここでちょっと考えて欲しい。



7. 売上原価（既習）

前年の繰越商品 280	売上原価 ?
仕入 350	この年の繰越商品 140

このように計算したということは、売上原価は
[前年からの繰越商品]+[仕入]-[次年への繰越商品]
という計算で出てくると言うことだ！

つまり、**売上原価は仕入と繰越商品の差額で計算できる**
ということなんだ！

ここまでのかな？



7. 売上原価（既習）

前年の繰越商品 280	売上原価 ?	売上原価 490	売上 700
仕入 350	この年の繰越商品 140	儲け 210	

9ページでも言ったように、「儲け」= 売上 - 売上原価で、さらに売上原価は「仕入」と「繰越商品」で計算できた。

で、今何の話を長々としてきたかというと、**商品売買は、「仕入」「売上」「繰越商品」の3つの勘定で仕訳する**ということを説明してきたんだっただけ、理解できたかな。

上の**赤字**だけで**緑字の「儲け」**まで説明できているよね？
売上原価は損益計算書に記入される重要事項だ！



8. 繰延・見越

ここまでの決算整理仕訳は既に学習した内容だったけど、
ここからの二つ

8. 繰延・見越

9. 消耗品

は今回新しくやる内容だ。

とはいっても、単純な内容なので、すぐに理解できると思う。

まずは、繰延・見越についてだ！



8. 繰延・見越

まずは、繰延・見越の仕訳をする理由を見ていこう。

家賃や受取利息などの収益、支払利息などの費用には、数ヶ月分まとめて支払ったり受け取ったりするものがある。その中には、当期の分だけでなく、次期の分も含まれていることがあるんだ。

その様な場合、決算の時に当期の費用・収益と次期の費用・収益とを区別しなければならない。

例えば、ある看板に自分の店の広告を貼ると言うことで、期首に[3年で60万円]で契約したとしよう。

1年経って、損益計算書には、「広告費600,000」と記されているわけだけど、この年に全額費用とするのは変だよね？

[3年にわたって毎年20万円ずつ]と処理する方が正しいはずだ。このようなときの処理が繰延・見越なんだ。



8. 繰延・見越

では、まずは繰延から具体的に見ていこう！
費用繰延と収益繰延があるので、それぞれを理解してほしい。

倉庫を借りたときに支払った支払家賃¥600,000は、9月1日に向こう1年分を支払ったものである。なお、決算日は3月31日である。

資産の増加

(借方) 前払家賃 250,000 (貸方) 支払家賃 250,000

費用の消滅

1年で600,000円なのだから、毎月5万円と計算できる。
当期に使った分は9,10,11,12,1,2,3の計7か月分だから、本来は
(借方) 支払家賃 350,000 (貸方) 現金など 350,000
とすればよかったのに、
(借方) 支払家賃 600,000 (貸方) 現金など 600,000
としていたのだ。
よって、次期の5か月分は当期の費用ではないので、除くんだ！



8. 繰延・見越

今度は収益の繰延だ。

受取利息 ¥120,000は、9月1日に向こう1年分を受け取ったものである。なお、決算日は3月31日である。

収益の消滅

(借方) **受取利息 50,000** (貸方) **前払利息 50,000**

負債の発生

1年で120,000円なのだから、毎月1万円と計算できる。

9,10,11,12,1,2,3の計7か月分だから、本来は

(借方) **現金など 70,000** (貸方) **受取利息 70,000**

とすればよかったのに、

(借方) **現金など 120,000** (貸方) **受取利息 120,000**

としていたのだ。

よって、次期の5か月分は当期の収益とはせずに除くんだ！



8. 繰延・見越

ここで注意点！

今、
本来は

(借方) **現金など 70,000** (貸方) **受取利息 70,000**

とすればよかったのに、

(借方) **現金など 120,000** (貸方) **受取利息 120,000**

としていたのだ。

といったのだけど

(借方) **受取利息 50,000** (貸方) **前受利息 50,000**

ではなく

(借方) **受取利息 50,000** (貸方) **現金など 50,000**

とすべきなんじゃないのか？と思った人もいるかも知れない。



8. 繰延・見越

(借方) 受取利息 50,000 (貸方) **前受利息** 50,000
(借方) 受取利息 50,000 (貸方) **現金など** 50,000

ここでよく考えて欲しいのは、
「もう、現金でもらってしまった」
ということだ。

正確に処理するなら、確かに

(借方) 受取利息 50,000 (貸方) **現金など** 50,000
として、

「すいません、うちは決算時にまだ7か月分しかいただけませんので、
とりあえず5万円お返ししてあとでまた受け取ります」といって
現金5万円を返した方がいいのかも知れない。
でも、実際はそんなに面倒な事はやってられないよね。

そういうわけで、仮の負債として前受利息を使っているんだ。



8. 繰延・見越

ちなみに、次期になったら、

(借方) **前受利息 50,000** (貸方) **受取利息 50,000**

という処理をして、

まとめると

(借方) **現金など 120,000** (貸方) **受取利息 120,000**

となる仕組みになっているんだ。

理解できたかな？



8. 繰延・見越

次は見越だ。
仕組みは同じなので、いきなり例題にはいるよ。

2月1日に現金 ¥500,000を貸し付け、利息は7月31日返金と同時に ¥30,000を受け取る予定である。決算日3月31日の仕訳をしろ

資産の発生

(借方) 未收利息 10,000 (貸方) 受取利息 10,000

収益の発生

さっきと考え方は同じだ。
30,000円の利子は貸し付けていた期間6か月で生じたものだから、決算までの2・3月の間でも利子は2か月分は当期に入る。
よって、 $30,000 \div 6 \times 2 = 10,000$ 円分は当期の収益として計算しなければならない。

もういいよね？



8. 繰延・見越

この見越・繰延の分野では
前払・前受・未収・未払という言葉が出てくるが、
それぞれの意味をしっかりと理解して、どの場面で使うのかイメージ
できるようになって欲しい！

前払：前もって払ってしまった分

→ある意味「返して！」と言えば返してもらえる分なので、資産

前受：前もって受け取った分

→「やっぱり返して」と言われたら返す分なので、負債

未収：本来受け取ってしかるべき分をまだ受け取っていない

→資産

未払：本来払ってしかるべき分をまだ支払っていない

→負債

しっかり使い分けを出来るようにしておいてね。



9. 消耗品

消耗品は、文房具や紙などのことだ。
例えば紙なんて毎日たくさん使うけれど、あまり細かくカウントする必要はないよね。

そこで、使った分だけまとめて処理するのが消耗品という勘定だ。

まあ、具体的に見るのが一番早いよ。

処理は2通りあるので、理解して欲しい。
いずれも簡単だよ。



9. 消耗品

①買ったときに資産として計算する方法
消耗品勘定には¥50,000(借方)が記入されている。
当期末までに、消耗品を¥43,000使った。

費用の発生

(借方) **消耗品費 43,000** (貸方) **消耗品 43,000**

資産の減少

『¥50,000が記入されている』より、すでに
(借方) **消耗品 50,000** (貸方) **現金など 50,000**

という仕訳がされているのはわかるよね？

50,000円から43,000円分使ったわけだから、消耗品は7,000円と
なっているのが正しいわけだ。

よって、上のような仕訳をして、相殺されて「消耗品」勘定として
7,000円残っている状態になる。



9. 消耗品

①買ったときに費用として計算する方法
当期に消耗品を¥50,000購入し、消耗品費勘定で処理した。
決算日においては消耗品は¥7,000残っている。

資産の増加

費用の消滅

(借方) **消耗品 7,000** (貸方) **消耗品費 7,000**

『¥50,000購入し、消耗品費勘定で処理した』より、すでに
(借方) **消耗品費 50,000** (貸方) **現金など 50,000**
という仕訳がされている。

ただ、当期に使ったのは43,000円分なので、7,000円分については
次期に繰り越すわけだ。

考えとしては、まさにさっきやった「費用の繰延」と一緒だね。

わかったかな？



10. 訂正仕訳

一応項目として設けたけど、説明は敢えてしないよ。

間違っていた仕訳を正しい仕訳に戻すこと、
これが訂正仕訳だ。

やり方はわかるよね？

- ①間違った仕訳と全く逆の仕訳をやって、相殺して取消す
 - ②正しい仕訳をする
- これだけだ！



11. 貸借対照表・損益計算書の作成

さて、いよいよ貸借対照表・損益計算書の作成だ。
簡単に言ってしまうと、今までやってきた処理を指示通りに書き込む
だけだ。

費用	収益
儲け分	

損益計算書
として報告

資産	儲け分(資本)
	負債
	資本

貸借対照表
として報告

そうすると、このようになるんだ！



11. 貸借対照表・損益計算書の作成

では、実際に見てみよう！

例えば、損益計算書とはこのようなものだ。

損益計算書

平成×1年4月1日から平成×2年3月31日まで（単位：円）

費用	金額	収益	金額
売上原価	400,000	売上高	750,000
支払地代	120,000	受取利息	5,000
減価償却費	80,000	有価証券評価益	3,000
貸倒引当金繰入	30,000		
当期純利益	128,000		
	758,000		758,000



11. 貸借対照表・損益計算書の作成

まさに同じ事を表しているわけだ！

費用 630,000	収益 758,000
儲け分128,000	

損益計算書

平成×1年 4月 1 日から平成 ×2 年 3 月 31日まで (単位:円)

費 用	金 額	収 益	金 額
売上原価	400,000	売上高	750,000
支払地代	120,000	受取利息	5,000
減価償却費	80,000	有価証券評価益	3,000
貸倒引当金繰入	30,000		
当期純利益	128,000		
	758,000		758,000



11. 貸借対照表・損益計算書の作成

お次は貸借対照表だ。

貸借対照表

平成 ×2年 3 月 31 日

(単位:円)

資 産	金 額	負債及び資本	金 額
現金	100,000	買掛金	150,000
当座預金	150,000	未払地代	30,000
売掛金	300,000	資本金	1,000,000
貸倒引当金	30,000 270,000	当期純利益	128,000
有価証券	28,000		
商品	200,000		
建物	800,000		
減価償却累計額	240,000 560,000		
	1,308,000		1,308,000



11. 貸借対照表・損益計算書の作成

上下の図は同じ事を表している！

資産 1,308,000	儲け分128,000
	負債 180,000
	資本 1,000,000

貸借対照表

平成 × 2年 3 月 31 日

(単位:円)

資 産	金 額	負債及び資本	金 額
現金	100,000	買掛金	150,000
当座預金	150,000	未払地代	30,000
売掛金	300,000	資本金	1,000,000
貸倒引当金	30,000 270,000	当期純利益	128,000
有価証券	28,000		
商品	200,000		
建物	800,000		
減価償却累計額	240,000 560,000		
	1,308,000		1,308,000



11. 貸借対照表・損益計算書の作成

貸借対照表・損益計算書の作成が2級や1級ではよく出題されるんだけど、3級はこれくらいのイメージで十分だ！

あとは各自テキストを見ながら、細かいところを見ていって欲しい！



まとめ

1. 決算(1)の復習
2. 決算整理仕訳
3. 現金過不足(既習)
4. 貸倒引当金(既習)
5. 減価償却(既習)
6. 引出金(既習)
7. 売上原価(既習)
8. 繰延・見越
9. 消耗品
10. 訂正仕訳
11. 貸借対照表・損益計算書の作成

今回はこのような内容だった。



終わりに

今回で日商簿記3級の全ての範囲が終了しました。

あくまで、この一連のフラッシュは
『イメージをつかんで、簿記の学習を効率よくしよう！』
という目的で作成されていますので、
帳簿組織や伝票など、ある程度理解している人にとっては
自分で学習できる分野まで説明することはしません。

さあ、これでイメージをつかむための道具は全て用意しました！

あとは、この簿記フラッシュでイメージをふくらませて、
効率よく学習し、効率よく合格を勝ち取ってください！

それでは！



制作者情報

- 簿記フラッシュ-日商簿記3級
<http://boki3.source-of-information.com/>
これまで作成したフラッシュと内容を公開しています。
- ご意見・ご感想等ございましたら、
info@source-of-information.com
までお寄せ下さい。